様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７１０２８２

研究課題名（和文）ポスト・スハルト期インドネシアにおける「華人の伝統宗教」の現在

研究課題名（英文）Current Situation of "Traditional Chinese Religion" in Post-Soeharto Indonesia

研究代表者
津田　浩司（TSUDA, Koji）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：６０５８１０２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会・政治環境が大きく変わりつつあるスハルト体制崩壊後のインドネシアにおいて、華人系住民の信仰実践（特に「華人の伝統宗教」とされる領域）の実態がいかなるものか、またいかに変容しているかを、質的・量的に明らかにすることを目的とした。
この目的のために、これまで自らジャワ島を中心に行ってきた調査を踏まえ、新たにスマトラ島、カリマンタン島、スラウェシ島の主要都市の寺廟の法的・宗教的ステータス等に関するサーヴェイ調査を行った。また、ジャワ島を拠点とする三教（Tridharma）系の宗教諸団体の活動の展開について集中的に調査を行い、その教義面・儀礼面における宗教体系化の動向を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify both qualitatively and quantitatively the actual situation of the religious lives of the ethnic Chinese (especially the realm of so-called "Chinese traditional religion") in post-Soeharto Indonesia, the period of drastic socio-political changes.
For this purpose, in order to highlight the difference with the general religious situation observed in Java, I conducted survey researches at Chinese temples (especially their legal and religious status etc.) located in major cities of the Sumatra, Kalimantan and Sulawesi Islands. Also, I investigated the development of the activities of the "Three-teaching (Tridharma)" organizations centered in Java, and traced their on-going efforts to systematize their respective doctrines and rituals.

研究分野：文化人類学、地域研究、華僑華人研究

キーワード：インドネシア　ポスト・スハルト期　伝統宗教　信仰実践の変容　華人

１．研究開始当初の背景

1998 年にスハルト新秩序体制が崩壊したインドネシアでは、「改革」・「民主化」・「地方分権化」等の呼び声のもと、政治・社会的にさまざまな変化が生じてきた。とりわけ同国に暮らす華人系住民（以下「華人」）にとっては、大きな変化の十余年であった。1965 年の 9 月 30 日 事件を機に誕生したスハルト体制が、一般に中国や華人にまつわるものに対し極度に警戒・抑圧的であったのに比し、体制転換後に成立した諸政権は、国内外からの批判を受け、従来の差別的な対華人政策を大幅に見直してきたからである。こうした社会環境の大きな変化を受け、今同国では、長らく公共の場で表出を禁じられてきた「華人文化」を誰もが自由に享受できる空気が、全国的に生じている。

無論「華人文化」表出のあり方には、政治的色合いの強いもの、観光・商業と結びついたものなど様々な形があるが、近年ひとつの重要な表出の場として焦点化しているものに、寺廟（klenteng）がある。華人たちの伝統的信仰の拠り所であり続けてきたこれら施設は、スハルト期にあっては活動が大幅に制限され日陰の立場に置かれてきたが、上述のようなここ数年の「華人文化」開放の流れに伴い、次第にその活動が活性化しつつある。

それでは、ポスト・スハルト期に入って 10 年あまり経った今、この国の寺廟およびそれを取り巻くコミュニティ周辺では、具体的に信仰や活動の実践の面でどのような事態が生じ、またどのような変化が生じているのだろうか。他方、「唯一神への信仰」を国是に掲げるインドネシア社会において、「華人の伝統宗教」であることを掲げる各宗教団体は、国家が課す宗教政策の中で自らをどのように位置付けているのだろうか。また、ポスト・スハルト期の現在、それら団体は各地の寺廟に対しどのような働きかけを行なっており、一方で当該寺廟を支える各地の華人コミュニティはどのようにそれに応じているのだろうか。

２．研究の目的

本研究は、スハルト体制崩壊後の現代インドネシアで、社会・政治環境が大きく変わりつつある中、華人系住民の信仰実践の実態・変容を明らかにすることを目的とした。特に、仏教･孔教（儒教）・道教にまつわる諸宗教団体（いわゆる「華人の伝統宗教」と見なされる宗教を奉じる団体）、ならびに各地に点在する寺廟コミュニティでのフィールド調査を通じて、上記内容を質的・量的に明らかにすることを目指した。「華人文化」開放の流れに伴い自己模索を始めたインドネシア華人たちが、どのように自らの「伝統宗教」を位置付け直そうとしているのか、また人々の信仰実践や意識のあり方にこれら背景がどのような変化をもたらしつつあるかを具体的に明らかにすることは、従来未研究だった宗教領域に重要なデータを提供するのみならず、今後のインドネシアの宗教全体の布置関係の行方を占うのにも資するものである。さらには、ややもすれば「再中国化・再華人化」とひと言でまとめられがちな現象の実態を、人々の信仰実践の場からつぶさに観察することで、その概念的有効性／限界性をも明らかにできると考えた。

３．研究の方法

(1)「華人の伝統宗教」の組織化の動向や広がりを全国レベルで把握するため、ジャワ島・バリ島以外で華人人口が比較的多い地域の寺廟を可能な限り多く実地調査し、その活動実態や傾向性を量的に把握する。

(2)「華人の伝統宗教」を構成する各宗教団体のうち、特に三教系の諸団体の近年の動向を、聞き取りや政策資料・団体側資料等を基に整理し、国家政策との関係で明らかにする。

(3)上記(1)でサーヴェイした地点の中から、宗教布置関係上の問題が端的に表れている地点を選び、インテンシヴな調査を行う。特に、孔教・道教などの各宗教（団体）がいかに自らの正統性を主張し、いかに人々を取り込もうとしているか、またそれに対し人々はどのように対応しているかを具体的に明らかにする。

４．研究成果

(1)上記 3.(1)、すなわち、いわゆる「華人の伝統宗教」の組織化の動向や広がりを全国レベルで把握し、その傾向性を理解するため、下記の通り実地調査を行った。

①平成 24 年度は、ジャワ島とは異なるプロセスで華人社会が形成されたスマトラ島リアウ州の漁町バガンシアピアピ（Bagansiapi-api）、および北スマトラ州都メダン（Medan）市とタンジュンバライ（Tanjung Balai）において可能な限り多くの寺廟、ならびに華人団体を訪れ、その成立・形成過程や現今の活動実態について聞き取り調査を行った。その結果、特にメダン市においては、寺廟の宗教的位置づけの面で仏教寺院（Vihara）の地位を得ているものが多く、それはジャワにおいて見られたがごとくスハルト時代の政治的カムフラージュという要因以外にも［Tsuda 2012］、20 世紀初頭以来の同地における仏教布教活動の影響力の強さが働いていることが浮かび上がった［cf. Franke 1988: 82-155］。他方で、華人の漁民たちにより栄えた歴史を有するバガンシアピアピでは、福建系の華人たちが同地に定着した植民地期末期以来形成されたと見られる複数の宗親会組織が今なお機能しており、（土葬後の洗骨を伴う複葬、哭女や鼓笛隊を伴う葬送行列などを含め）他地ではあまり見られなくなった「伝統」が依然息づいていることが観察された。

②平成 25 年度は、北スラウェシ州都メナド（Menado）市とその近郊のトモホン（Tomohon）市およびビトゥン（Bitung）市、

東カリマンタン州都サマリンダ（Samarinda）市とその南のバリッパパン（Balikpapan）市、ならびに西カリマンタン州都ポンティアナッ（Pontianak）市の寺廟調査を行った。これら地域は、スハルト時代の宗教政策や政治状況の影響を受け、（寺廟の数が極めて多く相対的に政府の管理が及んでいない西カリマンタン地域を除けば）寺廟の法的・宗教的ステータスの面では、ジャワ島をはじめとする全国的状況と極めて類似した構図が見られた。ただし組織化の面では、ジャワ島を拠点とし各地の寺廟を糾合しようと働きかけを行っている三教・孔教系諸団体の直接的影響力は、これら外島地域では実質的にはほとんど及んでいないことが、諸寺廟ならびに華人団体等における聞き取りを通して浮かび上がった。

③平成 26 年度は、南スマトラ州都パレンバン（Palembang）市、および西スマトラ州都パダン（Padang）市とその内陸丘陵上に位置するパダンパンジャン（Padang Panjang）市およびブキッティンギ（Bukittingi）市の寺廟や華人団体を調査した。このうちパレンバン市では、歴史的に小規模な宗廟が無数に林立している中にあって、その一部を取り込む形で、ジャワとほぼ同様の構図［Tsuda 2012］による各宗教団体間（特に三教と孔教）の勢力争いが展開していることが観察された。他方で、パダン市およびその周辺では、19 世紀後半に結成された秘密結社に起源をもつ華人組織（常明堂 HBT と福徳堂 HTT、現在はともに葬祭互助を含むコミュニティ組織として機能）が今なお同地の人々の社会生活上重要な地位を占めており［cf. Erniwati 2007: 137］、それがゆえに他地域で影響力を持っている宗教団体や華人系の社会組織が十全に展開し得ていない様を実見した。

④平成 27 年度は、バンカ・ブリトゥン州の主要 2 島、すなわちバンカ（Bangka）島とブリトゥン（Belitung）島の寺廟調査を行った。バンカ島は 18 世紀から、ブリトゥン島は 19 世紀半ばから、主に客家系の労働者が錫鉱山開発に従事することで定着した歴史を有する地域であり、巨石崇拝、あるいはマレー半島によく見られるダトゥ（Datok）の配祀が見られるなど、福建系が多数を占める地域とは異なる宗教状況が観察された。両島では近年、台湾を拠点とするマイトレーヤ系の仏教寺院が増えたり、あるいは孔教団体の支部（MAKIN）が設立され既存の寺廟を孔教の施設として位置づけようと画策しているなど、やはりポスト・スハルト期に「華人の伝統宗教」の領域で全国的に生じているのと同型の問題［Tsuda 2012］が、これら地域でも起きていることが確認できた。

(2)上記 3.(2)、すなわち、いわゆる「華人の伝統宗教」を担うと自負する諸宗教団体の側が、いかにポスト・スハルト期の宗教状況に対応しようとしているかについては、その全体的布置関係を Tsuda［2012］で明示し、次いでジャワを拠点にする三教（Tridharma）系の諸団体の歴史的展開と現在の動向を津田［2012］および Tsuda［2015］の中で体系的に明らかにした。特に後者の 2 論文では、(a)20 世紀初頭に「華人の精神的支柱」を模索する中で設立された三教會（Sam Kauw Hwee）の流れを汲み西ジャワを拠点とするインドネシア・トリダルマ仏教協会（Majelis Agama Buddha Tridharma Indonesia）、(b)1960 年代後半にスハルト体制の成立とともに窮地に立たされた寺廟を救うべくその傘団体としてスラバヤを拠点として成立した全インドネシア・トリダルマ礼拝所連合会（Perhimpunan Temat Ibadat Tri Dharma se-Indonesia）、および(c)(b)の中ジャワ州支部、の 3 つの宗教団体（支部）の近年の活動に焦点を当てた。同論文では、これら(a)〜(c)の諸宗教団体がそれぞれいかに自らの教義を確立し、儀礼を規格化しようとしているかを詳細に追いつつ、それら宗教体系化の動きは、近年再公認化された孔教団体や林立し出した道教系諸団体の動向を横目に見ながら自らの正当性を図ろうという思惑に起因しているのみならず、スハルト時代を通じていわゆる「中華・華人にまつわるもの」全般が表出を禁じられた結果、華人の中若年層を中心にそれらに関する知識が実践的に受け継がれていない中にあって、人々が抱くそれら知識に対する「自信のなさ」に積極的に応えようとする宗教団体側からの応答である（その限りにおいて、「宗教」の領域は「文化」の領域にまで浸透・拡大し得る）、と分析した。

(3)上記 3.(3)の方法で掲げた点については、時間的制約のため、直接的な成果に結びつけるだけの十分な調査を実施できなかった。この点については、報告者が 2002 年来定点的に調査してきた中ジャワ州ルンバン県の華人コミュニティにおける宗教動向の経緯［cf. 津田 2006］を踏まえつつ、同地の寺廟をめぐる問題系の展開を継続的に観察・分析していくことにより、今後微細に明らかにしていきたい。

＜引用文献＞

①Erniwati (2007) *Asap Hio di Ranah Minang: Komunitas Tionghoa di Sumatera Barat*. Yogyakarta: Penerbit Ombak.
②Franke, Wolfgang (1988) *Chinese Epigraphic Materials in Indonesia Vol.1*. Singapore: South Seas Society.
③津田浩司 (2006)「中国寺院か仏教寺院か？―スハルト体制下インドネシアの交渉される華人性」,『南方文化』(33): 67-106.
④TSUDA Koji (2012) “The Legal and Cultural Status of Chinese Temples in Contemporary Java”, *Asian Ethnicity* 13(4): 389-398.
⑤津田浩司 (2012)「インドネシアにおける「中華の宗教」の現在―2000 年代以降の

体系化の動向を中心に」,『華僑華人研究』(9): 72-94.

⑥TSUDA Koji (2015) "Systematizing 'Chinese Religion': The Challenges of 'Three-teaching' Organizations in Contemporary Indonesia", *DORISEA Working Paper Series* (18): 1-15.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① TSUDA Koji, "Systematizing 'Chinese Religion': The Challenges of 'Three-teaching' Organizations in Contemporary Indonesia", *DORISEA Working Paper Series*, 査読有, No.18, 2015 年, pp.1-15.

②津田浩司, 「「誰にとっての英雄か」から始まる探求」, 『民博通信』, 査読有, 146 号, 2014 年, pp.26-27.

③津田浩司, 「書評 北村由美著『インドネシア 創られゆく華人文化—民主化以降の表象をめぐって』」, 『アジア経済』, 査読有, Vol.55(4), 2014 年, pp.127-130.

④津田浩司, 「インドネシアにおける「中華の宗教」の現在—2000 年代以降の体系化の動向を中心に」, 『華僑華人研究』, 査読有, 9 号, 2012 年, pp.72-94.

⑤TSUDA Koji, "The Legal and Cultural Status of Chinese Temples in Contemporary Java", *Asian Ethnicity*, 査読有, Vol.13(4), 2012 年, pp.389-398.
DOI: 10.1080/14631369.2012.710076

〔学会発表〕（計　14 件）

①津田浩司, 「コメント—華人研究と宗教研究の議論構成上の同型性？」, 日本華僑華人学会 2015 年度研究大会 シンポジウム「華僑華人からみた宗教」, 2015 年 11 月 15 日, 京都大学（京都市左京区）.

②津田浩司, 「藤野陽平著『台湾における民衆キリスト教の人類学』(2013 年, 風響社）へのコメント」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「人類学におけるミクロ‐マクロ系の連関」公開合評会, 2015 年 7 月 4 日, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

③津田浩司, 「インドネシア華人の「帰国」をめぐる言説空間—*Star Weekly* 誌（1958 年～60 年）の分析を中心に」, 東南アジア学会 2015 年度第 3 回関東例会・6 月例会シンポジウム「インドネシアと香港のメディアにみられるインドネシア華人の「帰国」」, 2015 年 6 月 27 日, 東京外国語大学本郷サテライト（東京都文京区）.

④津田浩司, 「ポスト・スハルト期の歴史記述と国家英雄制度」, 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 分科会「「国家英雄」認定に見る地方と民族の現在」(代表: 山口裕子), 2015 年 5 月 31 日, 大阪国際交流センター（大阪市天王寺区）.

津田浩司, 「文化は誰のものか？—バティック（ジャワ更紗）を通して考える」, 所沢市吾妻まちづくりセンター・公民館講座「世界の文化を学ぶ—東南アジアの文化と歴史そして今」, 2014 年 7 月 23 日, 所沢市吾妻まちづくりセンター公民館（埼玉県所沢市）.

⑥津田浩司, 「民族と「らしさ」—インドネシアの華人社会を通して考える」, 所沢市吾妻まちづくりセンター・公民館講座「世界の文化を学ぶ—東南アジアの文化と歴史そして今」, 2014 年 7 月 16 日, 所沢市吾妻まちづくりセンター公民館（埼玉県所沢市）.

⑦津田浩司, 「インドネシアの国家英雄ジョン・リー—幾重にも本質化された語りを解きほぐす試み」, AA 研共同研究会「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」2013 年度第 3 回研究会, 2014 年 2 月 7 日, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

⑧TSUDA Koji, "'Chinese Religion' in Modern Indonesia: Focusing on the Trend Toward Systematization in the Post-Soeharto Era", DORISEA mid-term conference 2013, 2013 年 6 月 28 日, University of Goettingen（ゲッティンゲン市, ドイツ）.

⑨津田浩司, 「インドネシア近現代史の再考と国家英雄」, 国立民族学博物館共同研究 (若手)「「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生」平成 24 年度第 1 回研究会, 2012 年 12 月 22 日, 国立民族学博物館（大阪府吹田市）.

⑩津田浩司, 「東南アジアの華僑—「華人らしさ」をめぐって」, まちだ市民国際学—今、躍動する東南アジア, 2012 年 6 月 7 日, まちだ市民大学 HATS（東京都町田市）.

⑪ TSUDA Koji, "Research on 'Chinese Traditional Religion' in Post-Soeharto Indonesia", Seminar on Chinese Indonesians, 2012 年 8 月 31 日, The Research Center for Society and Culture, The Indonesian Institute of Sciences (PMB-LIPI)（ジャカルタ首都特別州, インドネシア）.

〔図書〕（計　3 件）

①津田浩司, (分担執筆)「序論—「華人学」の循環論を超えて」, 津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（共編著）『「華人」という描線—行為実践の場からの人類学的アプローチ』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 & 風響社, pp.19-47.

②津田浩司, (分担執筆)「インドネシアの国家英雄ジョン・リー—「華人」という「主体」の物語を問う」, 津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（共編著）『「華人」という描線—行為実践の場からの人類学的アプローチ』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化

研究所 & 風響社, pp.275-372.
③TSUDA Koji,（分担執筆）“Batiks Dyed with ‘Chineseness’: On Ethnic Chinese and Their Cultural Representation in Post-Soeharto Indonesia”, in TOKORO Ikuya (ed). *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia*, ILCAA-TUFS, 2015, pp.225-267.

６．研究組織

(1)研究代表者

津田 浩司（TSUDA, Koji）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：60581022